

不満続出、混雑は必至

「なんとかしてくれ」

三川 鉦

脱衣場統合と自転車置き場移転

十月一日、三川鉦は第二脱衣所を第一脱衣場に統合、第二脱衣所を自転車置き場にしたいと提案してきまされた。

現場からは、統合される第一脱衣場は狭くて暗い。ロッカーの前を通れない。など混雑についての不満が多く、提案と同時に移動を強行していることに大きな反発が起っています。

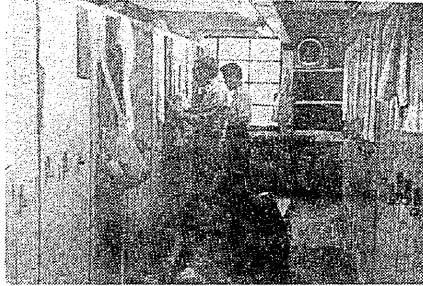
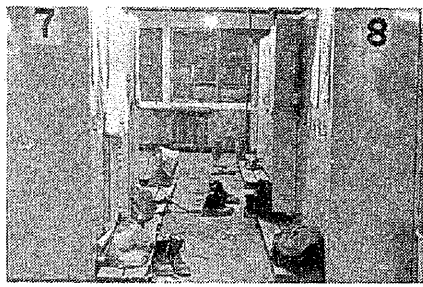
脱衣所の統合については、すでに本年度上期に予算を含めて計画され、予算上の理由で本社から差し戻された経過があります。従って、計画の段階では三川鉦としても一定の拡張・改造の必要性を認めていたわけではあります。

今回の提案では、予算を最小限にした上で現状のままでの統合移動となっているもので、現場の声を無視した一方的な内容であり、容認できるものではありません。

三、浴場当番の休憩所を新設すること。

その他の点では、乾燥場と浴場の通路を広くすること、踏み板、中央通路の照明、などは移転が終わった時点で工事にかかる、冷房の強化については来年度上期に実施する、などが明らかにされました。

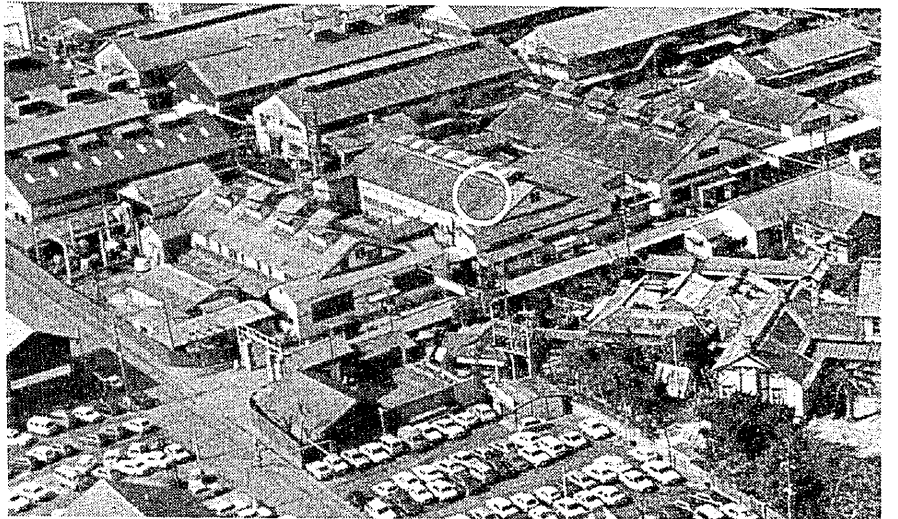
なお、この統合によって一列に並びますが、方別に配置したとしてもとくに一番などでは通り抜けができない状態も出てきます。「せめて中間の四角を抜いて通りやすくして欲しい」という声があがっています。



片方の奥が空いた状態。

両方に居ると大変だ。

手前が混んで中に入れない。



○印が浴場、右隣りが第1脱衣所。
左隣りは自転車置き場になる第2脱衣所。

「CO協定」改定

会社、交渉延期を申入れ

十月十五日で期限切れになる「CO協定」(昭和三十八年十一月九日の三川鉦炭害による一酸化炭素中毒患者並びに遺族の援護措置についての協定)について会社側は、「第八次石炭政策の審議が遅れており、改定交渉を当分の間延期したい」と申し入れてきました。

三菱社、報道内容を否定

「答申長引けば苦慮」と表明

会社側は、CO裁判の和解交渉の中でも現行協定の確定を要求する原告、組合側に対して「答申待ち」の態度で回答を保留しています。

この交渉延期申し入れについては、第八次石炭政策との絡みがあるにしても、和解交渉の回答延期と合わせて「誠意がない」と原告は不満を述べています。事実上告団も批判していますが、事実上感千円で、幹部会議をもった事実

であり、報道内容とは違っています。報道内容については全面的に否定しました。

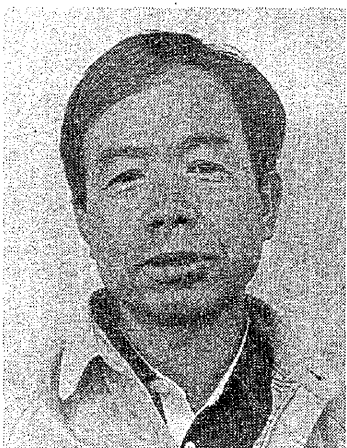
しかし、高島の現状については「月四億円以上の赤字が続き、社としての累積赤字も四百億円におよぼう」としており、答申が大幅に長引く動向に対しては苦慮している」と表明し、従前からの答申内容をみて判断するとの姿勢を微妙に変化させました。

これに対し炭労および高島支部は、①政府の動向は企業責任のみを求め、自らの責任逃れを強めている。この術策にはまってはならない。②答申前の不測事態などは、第八次策はおろか第七次策をも含めて石炭政策の根本を変化させることになる。③少なくとも答申までは労使とも努力するとの合意を守るべきである。などを表明し、あくまでヤマの維持・存続に努力するよう求めました。

父子二代で炭鉱の歴史を

早 田 正 次

(9月28日定年退職)



連帯と友情が誇り

定年退職。それは坑内労働者にとつてはうれしいことのように思えます。私もそうでした。そしてその日を九月二十七日に迎えました。やっと迎えた定年であり、とうとうやってきた定年です。昭和二十一年三月末入社です。

父は坑内馬の時代から働き、炭鉱が消し去られようとする時に炭鉱を去るのですから、父と子で炭鉱の歴史を歩いてきたような気がしています。

父は坑内馬の時代から働き、炭鉱が消し去られようとする時に炭鉱を去るのですから、父と子で炭鉱の歴史を歩いてきたような気がしています。

短いようでも四十年間は、現実としては私の人生の半分、いやそれ以上の長さになるかもしれないのです。この間の思い出は数えきれないのですが、中でも昭和二十八年の「英雄なき百十三日の闘い」の中で発生した「山の上事件」で逮捕されたことは、非常に貴重な経験でした。

十一・九の災害、九・二八の災害、有明鉱の災害と悲しいこともたくさんありました。私にとつて最も残念なことは、五十六年六月に同僚の吉田哲郎君を落盤災害で失ったことでした。今思い出しても断腸の思いです。時には悩み、時には憤り、また迷ったりのながらも、坑内でもともにも多くの先輩の姿勢に励まされ、多くの仲間が力強い連帯と友情に支えられながら、労働者としての道を歩みはづすことなへ、今日を迎えられたことを、深く感謝しています。

会社や職制に対して、全くおもんないこともなく、媚びる必要もなく、対等に処してこられたのも、三池労組員であったからこそ、私の誇りでもあります。公私のすべてにわたって、長い間ありがたうございました。きびしい情勢にうち負かされず、一層団結を固めて闘い抜かれることを心から願っています。